

第五章 お父さんとお母さんのための漢字の常識

●……スメール人は日本人の祖先？

「漢字は誰がつくったの？」

「なぜ日本の文字とアメリカの文字は違うの？」

「どうして漢字とかなとカタカナがあるの？」

「山という漢字は、なぜ山の形をしているの？」

なぜ、なぜ、なぜ……知識欲の旺盛な子どもは親を質問攻めにします。

こういうときに、漢字を誰がつくったなんて、そんなことはどうでもいいの！と叱らないでください。わからなければ、お母さんも知らないから、今度、調べておくねとか、一緒に勉強してみようということであれば、子どもの知識欲がそがれることはありません。

それに、漢字の成り立ちを知ることが、子どもだけでなく、親としても、けっこう知的好奇心を

刺激されるものです。

さて――。

人類は、今から一万年ぐらい前に「農耕」ということを知ったようです。最初に農耕を始めた人類は、今のイラクに住んでいたスメール人といわれています。そこにはチグリスとユーフラテスという二つの川が流れています。この流域に、どこからともなく移って来たスメール人という民族が土着しました。この地は沃野であって、小麦の種を蒔くと、秋には一〇倍一〇〇倍となって収穫できました。小麦は、次の年まで保存できました。たくさん収穫できれば、もう食糧を得るために毎日働かなくてもいいということになります。

そこで、人間は、生活をよくするためのいろいろな方法を考えました。ここに初めて「文化」というものが生まれたのです。イラク周辺の地域の地下深くには、それらの遺跡が残っていて、今も続々と掘り出されています。湾岸戦争があったときにいちばん心配されたのは、地下に埋没しているこれらの遺跡が崩壊しないかということでした。ヨーロッパの学者たちは今も研究を続けていますが、遺跡からは五〇〇〇年以上も前に書かれた文字が続々と発見されています。

これを解読すると、今から五〇〇〇年前でも、人間は豊かな生活をしてたということがわかります。

「ある家庭では非常に豊かな生活をしていて、自分の子どもを教育するために家庭牧師をつけていた」というようなことがわかる記録も発見されています。いつの時代でも、子どもの教育は親の最大関心事だったようです。その中には日記もあり、これを読むと、今の生活とまったく変わらないのです。

これは世界で最古の記録といわれている聖書よりも、ずっと古い年代です。聖書では三〇〇〇年前ぐらい昔のところまでしか溯れません。

このスメール人というのは、私が学生の頃まではまったく知られていなかった民族です。伝説的にはスメールという言葉もあったのですが、スメール人が実在した民族とは歴史上認められなかったのです。それが今や地中から数多くの遺跡が掘り出されたことによって実証されました。

しかし、スメール人は、今から四〇〇〇年前、歴史の舞台から忽然と消えているのです。消えているけれども言葉は残りました。そしてそのスメールの言葉に一番近いのは、なんと日本語なのです。

私はひそかに、われわれ日本人はスメール人の子孫であると思っているほどです。

●……四大文明と文字

人間は、言葉を発見してから他の動物とは違った存在になりました。

その言葉というものは口から出た瞬間に消えてしまいます。保存することができません。テープレコーダーがなかった昔は、言葉というものは口から出してしまえばそれで終わりでした。

どんなに大切な言葉でも、保存しておくことができないという欠点がありました。遠く離れた人に自分の意思を言葉で伝えたいと思っても、言葉というものは遠くまで届かないのです。

言葉は、時間的にも空間的にも制限された存在です。これを時間を超え空間を超えて伝えたい、人類は言葉をもった瞬間からこう願ったに違いないでしょう。しかし、それはなかなかできませんでした。一〇〇万年の人類の歴史の中でも、九九万年の間、言葉自体は存在したものの、文

字として記録する手段がありませんでした。その場で消えてしまっていたわけです。

ところが、言葉を伝える文字をスメール人が世界で初めてつくったのです。この文字は二〇世紀になって発見されましたが、まことに素晴らしいものです。私が推察するに、その後の文字はすべてはこれが手本、すなわち原型になっています。

つまり、漢字もこの影響によってつくられたものであると考えられます。いや、漢字は中国人が作り出したというのが専門家の通説です。しかし、私はそれは不自然であると思っています。

世界で文字をつくりだした民族は、このスメール人、続いてエジプト人です。従来はエジプトが最初だと考えられていました。それはスメール文字（楔形文字）が発見されなかったからです。エジプト文字の次はインドの文字です。インドの文字も今世紀になってから発見されました。やはり地下から発掘されました。

インドにはガンジス川とインダス川という二つの大河が流れています。ガンジス川は東の方に向かって流れ、インダス川は西の方に向かって流れます。このインダス川の中流に、モヘンジョダロやハラッパといった遺跡が発見されたのです。今から四〇〇〇年ぐらい昔だろうと推察されますが、これも見

事な文化を持っていたことがわかります。

ここからも文字が発見されましたが、これは従来のインドではまったく見られなかった文字です。このような文字があるということは、一九世紀まではわからなかったのです。

これも実はスメール文字と同じ構造を持った文字です。インドの文字も、やはりスメール文字に影響を受けているということがわかります。エジプト文字も同じ構造を持っています。

そして漢字が誕生したのは、今から三〇〇〇年前と推定されます。中国に「商」という国があったといわれています。これも伝説だという学者が多かったのですが、今世紀になって地中からその証拠が出土しました。

これを「殷墟」といいます。商のことを別名で殷と呼びます。その殷の都があったと思われる廢墟から発掘されたので、明らかに実在した国であることがわかりました。

●……アルファベットは借り物

このように、世界で文字をつくったのは四つの民族しかいません。

では、後はどうしたかというところ、この文字をいわゆる表音文字として借りました。たとえば日本語をアルファベットで表すと、二〇字もありません。十いくつかで日本語を全部表記することができます。

アルファベットは二六文字ですが、この中で重なったものがいくつかあります。ABCのCというのは、Sか、あるいはKの発音と同じです。XはKの音とSの音を二つ合わせたものです。

このようにアルファベットを発音記号としてみると、不要なものがいくつもあります。

現在使われているアルファベットはローマ字ともいわれますが、これはローマ帝国がヨーロッパを統一したとき、支配するために制定した文字です。その文字がローマ字です。ローマ帝国の公用語はラテン語ですから、ラテン文字とも呼ばれますが、国の名前を使ってローマ字、言語の名前をとってラテン文字ともいいます。

呼び名は進っても中身は同じです。しかしこのローマ字は、すべてローマ帝国で発明されたのかというところではなく、先進国ギリシャの文字をちょっと手直したものです。

ギリシャの文字は二四文字でした。そこでローマ帝国では、どうしても必要な文字をつくり、足りない文字のいくつかを削りました。そして差し引すると、二字増えて二六字になったのです。

それでは、ギリシャ文字はギリシャ人によって発明されたものかということ、そうではありません。

これはフェニキア文字を改造したものです。フェニキアというのは、現在のイスラエルとかレバノンです。この地域に住んでいた民族をフェニキア人といいました。

ポイント：親のいない子が立派な人間になったりしますが、あれは変な教育を受けなかったからだと思います。いい教育も受けられなかったかもしれないけれど、少なくとも個性を潰すような悪い教育は受けていません。詰め込みはされなかったから、放って置かれたにもかかわらず素晴らしい人間に成長したわけです。

実際はユダヤ人になるわけですが、この人たちが地中海を中心にして大活躍をします。その時

に使った文字をフェキア文字といいます。このフェキア文字にギリシャ人がちょっと手を入れて、これが元になってつくられたのがギリシャ文字です。

では、フェキア人がそれを自分で発明したかというと、これもまたそうではなく、源流はアッカドという民族だとされています。

●……「文」と「字」

ここに「文」という字があります。この字は点や線が縦横斜めに交錯している形であって、今の言葉でいえば模様、古い言葉では文様といいます。

その当時、つくられた文字のことをすべて「文」といいました。「山」という字も「川」という字も、線を三つ縦に並べてつくられた一種の文様ですから、これも「文」になります。

最古の漢字を「甲骨文」といいます。亀の甲羅や動物の骨に刻まれた文字だからです。

その次に現れるのが「金文」といって、金属に書かれた文字です。石に書かれた文字は「石文」といって、これらを総称して「金石文」といいます。

時代順でいうと甲骨文がいちばん古く、今から三〇〇〇年以上前で、金文、石文はだいたい二五〇〇年くらい前になります。

この「文」に対して「字」というのは、組み合わせによってつくられたものです。

「字」には“うかんむり”がついていますが、これは本来はちゃんと家の形をしていました。“うかんむり”というのは屋根の形ではなく、家の形だったのです。家の意味を表しています。“子”はいうまでもなく子どもです。

「字」という文字は、現在では、文字の意味に使われますが、最初つくられた時には、「家に子どもが生まれた」という意味をもっていたのです。家に子どもが生まれる、文から生まれたものだから、家と子どもで表したのです。

このように一つの図形で作られた「文」は、その数はいたって少なかったのですが、組み合わせでつくられる「字」となると、その数は非常に多くなります。

たとえば“人”という「文」があり、“木”という「文」があります。この二つを結びつけるとどんなこ

とが想像されるかというと、人が木に寄り添っている、あの人は木陰で休んでいる——こうして人と木を結びつけて「休」という意味を表す「字」ができます。

こういうように二つの「文」を組み合わせることによって「字」が画期的に増えてきたわけです。漢字の九五パーセントはそうしてできたものです。

なぜ「字」というかという点、二つものを組み合わせることは、二つの「文」が結婚したということになります。一方が男で一方が女だとすると、これが結婚して同じ家に住むと、たいていは子どもが生まれることになる。

つまり、家の中に子どもが生まれるようにしてできたものだから、これを「字」と名づけたわけです。

●……漢字には「呉音」と「漢音」がある

春秋時代には「呉」という国があり、この南のほうに「越」という国があり、この二つの国はよく戦

争をしました。だから仲の悪いことを「呉越」の関係といいます。また、仲の悪い同士が一つの船に乗る(同じ境遇におかれる)という意味で「呉越同舟」といいます。春秋時代というのは、今から二四〇〇年前ぐらいまで、約三六〇年間続き、孔子が生まれたのもその頃です。

この「呉」の国のあった地方から、日本へ漢字がもたらされるのです。

その伝わった経路ですが、韓国を通過して、あるいは直接日本へ、まず九州へ入って来ました。日本の文化のあけぼのは九州から始まるわけですが、おそらく紀元一世紀あたりには漢字が入って来たと思われれます。

一応書き加えておくと、中国には都というのは二つあって、一つは「長安」といいます。

ところが、ちょっと西に外れていて具合が悪いというので、もう一つ都をつくりました。これを「洛陽」といいます。長い歴史の間、都がたびたび変わりますが、長安を西の都、西都といい、洛陽を東都と呼び分けています。

五九三年に聖徳太子が摂政となって、天皇の勢力が日本全体におよんだ頃、小野妹子を正式な遣いとして中国(隋)に遣わします(六〇七年)。これが日本と中国の国交の始まりです。

私的な交わりというのは、呉を通じて行われていましたが、初めて堂々と中国の都に遣いが行くのです。

そうすると、漢字の読み方がまるで違うわけです。たとえば運動会の「会」という字は日本では「エ」と発音していました。ところが都へ行ってみると、同じ字を「カイ」と読んでいたのです。

国交が正式に始まると、長安の都の標準音というものが学者を通じて入って来ました。それで漢字の標準音という意味で、その読み方を「漢音」というわけです。従来読み方は呉から入ってきたものなので「呉音」というように、区別をするようになりました。

ポイント 大人になると繰り返しはバカバカしくなりますが、子どもは同じことをいつまでやっても飽きることがないのです。大人はすぐ満足するけれど、子どもはできるようにしなければなりません。やりたがる、という本性の違いを親も教師も知らないことが多い ようです。それで、あまりできると小学校へ入って怠けるのではないかと、自分の気持ちで子どもを押し量っているわけです。

●……新しい言葉は漢音で読まれる

たとえば「東京」という言葉がありますが、この「キョウ」という読み方は呉音です。ところが長安では「ケイ」と読んでいます。ですから、学者は「キョウ」とは読まず「ケイ」といいました。

「正月」という言葉も、日本人は初めから「ショウガツ」と読んでいましたが、長安では「セイゲツ」と読みました。このため江戸時代まで、学者の中では、正月のことを「セイゲツ」といいました。江戸時代でも教養のある人たちは「セイゲツも近くなりました」というように言ったようです。しかし、それよりも何百年も前から、日本人に長年呼びなれていた「ショウガツ」という呉音が日本人の体に染みついていたので、これはなかなか抜けませんでした。

言葉とか文字とかいうものは、伝統を重んじます。呉音というものが根づいていますから、それを改めることは至難の技です。

しかし新しくつくった言葉は極力標準音で読もうとするわけです。「ガツ」とは読まないで「ゲツヨウビ」というのです。「ガツヨウビ」といってもいいのですが、「ガツ」は呉音で、要するに方言である

とされています。

したがって新しい言葉をつくる以上は、漢字の正しい発音である漢音で読もうということになり「ゲツヨウビ」と読むようになったのです。

東京の「キョウ」というのも呉音です。しかし、東京と横浜とを合わせて「京浜(キョウヒン)」という時には、新しい言葉ですから「ケイヒン」と漢音で読みます。千葉との間も「京葉(キョウヨウ)」ではなく、やはり「ケイヨウ」と読みます。

このように新しい言葉をつくった場合は漢音で読まれます。しかし古い言葉は呉音で読み慣れていますから、「シヨウガツ」というような読み方をするわけです。

「絵」を「エ」と読むのは、もちろん「会(エ)」という字がついているから「エ」と読む、つまり呉音です。これに対して「絵画(カイガ)」というような言葉になると、漢音読みになるわけです。

ところで「絵(エ)」というのは、たいていの人は日本語だと思っていますが、これは中国語です。中国語の「絵」に相当する言葉は、当時の日本にはなかったのです。

つまり、当時の日本はまだ文化レベルが低かったので、「絵」というものを言葉としてもっていなかったわけです。そして中国から「絵」そのものが入ってきます。「これはきれいですね。何というものですか?」「それは絵です」。こういう具合に中国人が教えるわけです。そこで初めて「絵」というものがわかるのです。

「エ」というのは訓であり、日本の言葉であって「カイ」が中国の読み方、つまり音であるというような学者や辞書がありますが、これは誤りです。「エ」も「カイ」も音です。「エ」は呉音、「カイ」は漢音です。

●……漢字は「象形」と「指事」から始まった

漢字の形の構成や用法に関する六つの種類を「六書」といいます。学者は漢音で読みたがりながら「リクシヨ」と読みます。でも「ロクシヨ」と呉音で読んでもかまいません。

数を読むときは、呉音のほうが親しみやすいのです。イチ、ニ、サン、これはすべて呉音読みです。漢音で読むと「イツ」「ジ」「シン」になります。

象形(シヨウケイ)、指事(シジ)、会意(カイイ)、形声(ケイセイ)、転注(テンチュウ)、仮借(カシヤ)の六つの用法を合わせて六書といえます。そのうち象形と指事は「文」です。文字のうちの文にあたるものです。会意、形声は「字」です。

すなわち象形や指事は組み合わせの親になるものであり、これらが組み合わせることができるのが、会意、形声という子なのです。

「象形」というのは、ものの形を書き表したものの、象というのは、日本語で読むと象る(かたどる)という意味です。

ものの形を象る、例でいえば、お日様の形を象ったものが「日」という字です。お月様の形を象ったものは「月」になり、山の形を象ったものが「山」になります。日、月、山、川、人、馬などを象形といえます。漢字はよく象形文字だといわれますが、すべて象形文字というわけではありません。

象形文字はほんの一部です。何万という漢字があっても、そのうちの百いくつぐらいしかありません。

「指事」は事柄、ものに対して、形のない心の中だけに存在するものです。上とか下とか、一・二・

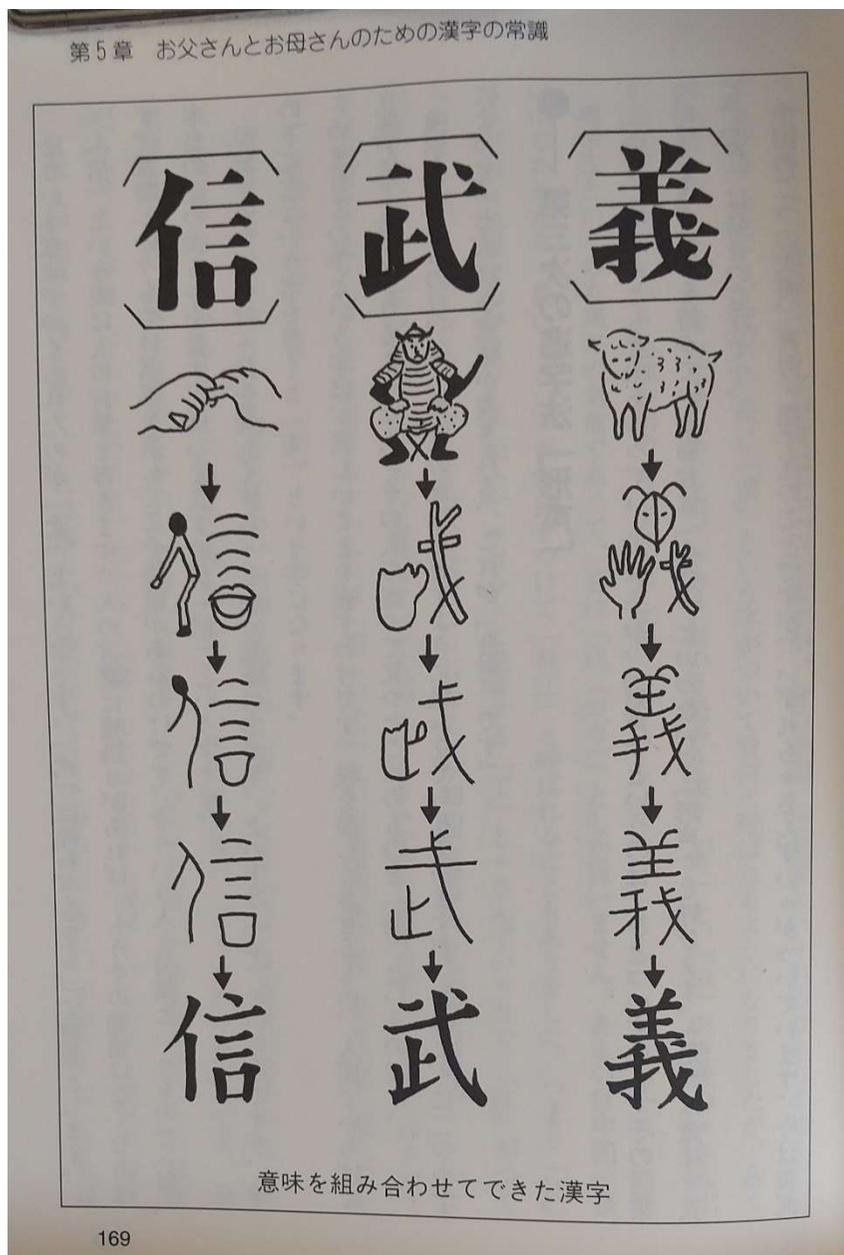
三・四などの数、大きいと小さいとか、こういうことを表したものです。「これは大きい」といっても、大きいという“もの”はなく、大きいという“こと”を示しています。ですから、大きいと言われたものがもっと大きいもの前に出ると、今度は小さいという表現に変わります。

こういうような抽象的な事柄を表すことを「指事」といいます。事柄を指さすという意味です。

ポイント 優秀な学校へ入ると伸びる子どもと逆に落ちる子どもがあります。たとえば生徒を学力順に上・中・下とクラス分けして学習指導をすると、各クラスとも上位にある子は学力が向上します。ところが一番上位のクラスでピリの子どもは、不思議なことに中のクラスの上位グループより学力がはるかに下がってしまったています。つまりいい学校に入ったためにかえってダメになるときもあるのです。

●……第二次の造字法「会意」

文字の組み合わせ方には、二つのタイプがあります。



「会意」というのは、意味を組み合わせるという意味です。「家」という意味と「子」という意味を組み合わせたものが「字」、「人」と「木」とで「休」という意味を表すという字だということは前にも書きました。「木」を二つ 組み合わせさせて、木がたくさんあるところ、つまり「林」という意味を示します。

「武」とか「信」とか「義」とかというような非常に抽象的な文字もあります。

「武」という字は「戈(ホコ)」という字と「止める」という字を組み合わせたものです。戈というのは戦いの道具ですから、戦のことを「干戈」、これは「盾」と「戈」という意味ですが、戦争の意味に戈という字は使われています。

つまり戦争を止め、抑止力になるのが武力であることになります。武力というのは本来は闘うための道具ではないのです。戦争を防止するため、戦争が起こらないようにするための備えが「武」です。

軍というのは敵国を侵したり、戦争を起こす手段ではなくて、国を守る、敵に侵されないようにすることです。軍備をしっかりと整えておけば、悪い国があっても決して野心を起こさない、攻めて

は来ない、つまり軍備というのは戦争の抑止力を持ったものなのです。そういう真味でつくられたのが「武」という字です。「武」は戦わざるをもって理想とします。

「信」というのは人の言葉と書きます。人の言葉に嘘偽りがあれば、もうその価値はなくなります。言葉というものは真実を表してこそ価値があるわけです。そういう人と言葉というもので「信」、本当の心の大きさを表す、真心を表すのが「信」という字です。

「義」というのは“我を美しくする”という意味の字です。上の字は「羊」という字ですが、羊の下に大という字を書くと「美」という字になります。つまりこの羊という字は、美しいことを表すわけです。我を美しくさせるもの、人間でいちばん立派だと尊敬されるような人、その人の寄って立つところのものを「義」というのです。

漢字というものは、その言葉の意味を表すように組み立てられていますが、このように二つの字によって一つの別な意味が表される、これが「会意」です。

●……第三次の造字法「形声」

「会意」は両方とも意味を持っているのですが、「形声」というのは、ひとつの文は必ずその言葉の発音を表すものを持っている場合は「会意」といわないで「形声」と呼びます。「形」は意味を表し、「声」は発音の意味です。

中国の二つの大河、黄河・揚子江のことですが、いずれも“さんずい”がついています。今は黄河とついでに、黄色という字が河の上につきますが、昔の中国には黄河という名称はありません。いつも黄色く濁っているのです、後に「黄」という字がついて黄河と呼ばれるようになりましたが、古くは「河(カ)」としか言いませんでした。“カ”という発音を表す「可」と、「川」の真味の“さんずい”とで、「河」という名前の川であるとしました。

揚子江というのも現在の名前であって、昔は「江(コウ)」としか言いません。あるいは中国一長い川であるから“長い”という形容詞をつけて「長江」と呼ばれることもありましたが、つまり「江」自体が固有名詞なのです。したがって“コウ”と発音する「工」と“さんずい”とで、「江」がつくられました。そうすると、「江」という川の名前だということが初めて見る人にもわかります。

柏、梅、椿は、木の名前です。木の名前はすべて右の“づくり”がその発音を表しています。白という字は中国音では“ハク”と発音するからこれは「柏(ハク)」という名前の木です。日本では「柏(カシワ)」と読みます。

梅は呉音では“マイ”と発音します。毎朝や毎日の「毎(マイ)」です。呉音ではさらに“メイ”と発音することがあります。実は「梅(ウメ)」というのは呉音の“メイ”から来たのです。日本語には「梅」を表す言葉がなかったと考えられます。したがって「梅」の木を見ても、これは何だということが言えなかったのです。おそらく「梅」の木は中国から渡来したものだと思われれます。

日本人が初めて梅を見て「これは何という木ですか？」と尋ねたときに、中国の人は「それは『メイ』です」と答えたのでしょう。日本語というのは、力強く言うときには「マミムメモ」の上には、“ウ”がつきます。

『メイ』そうですか『ウメ』ですか』というところで、“ウメ”と呼ぶようになりました。

他では「馬(ウマ)」がそうです。これは漢音では“バ”、呉音では“マ”と発音します。

「これは何ですか？ こんな動物は日本では見たことありません」

「それは『マ』です」

「そうですか。『ウマ』ですか」という具合で、“ウマ”になったわけです。

●……漢字の九〇パーセント以上が形声

「椿」という字は、中国では“チュン”と発音します。日本では“ツバキ”と読みます。

それは何故かという点、春真つ先に咲く花だからです。木に咲く花としては梅に先駆けて咲きますから、春の木と書いて「ツバキ」を意味しますが、中国では違います。

日本語に合うように使うから、中国における意味と日本での意味と違うものが出てきます。

木の名前とか魚の名前は、まったく中国とは別のものであることが少なくありません。“さがなへん”の字は、だいたい日本でつくられたと考えたほうがいいようです。中国で使われている字を使っても、意味が違うことが多いのです。

たとえば「鮎(アユ)」は、中国では「鯰(ナマズ)」を表す字として使われているのです。全然意味が

違います。したがって、同じ字であっても中身はまったく違うこともよくあるので、自分たちの使い方
方で判断すると、とんでもないことになります。

漢字は九〇パーセント以上がこの形声でつくられています。したがって、漢字の左のほうを見ると
意味がわかる、右のほうを見ると発音がわかるというような仕組みになっています。もちろんこの
逆もあります。

上下に分かれる時には、上を“かんむり”、下のほうを“あし”といいますが、この場合、上はだ
いたい意味を表し、下のほうは発音を表すというように考えたなら間違いないです。例外もありま
すが、大部分はそうです。

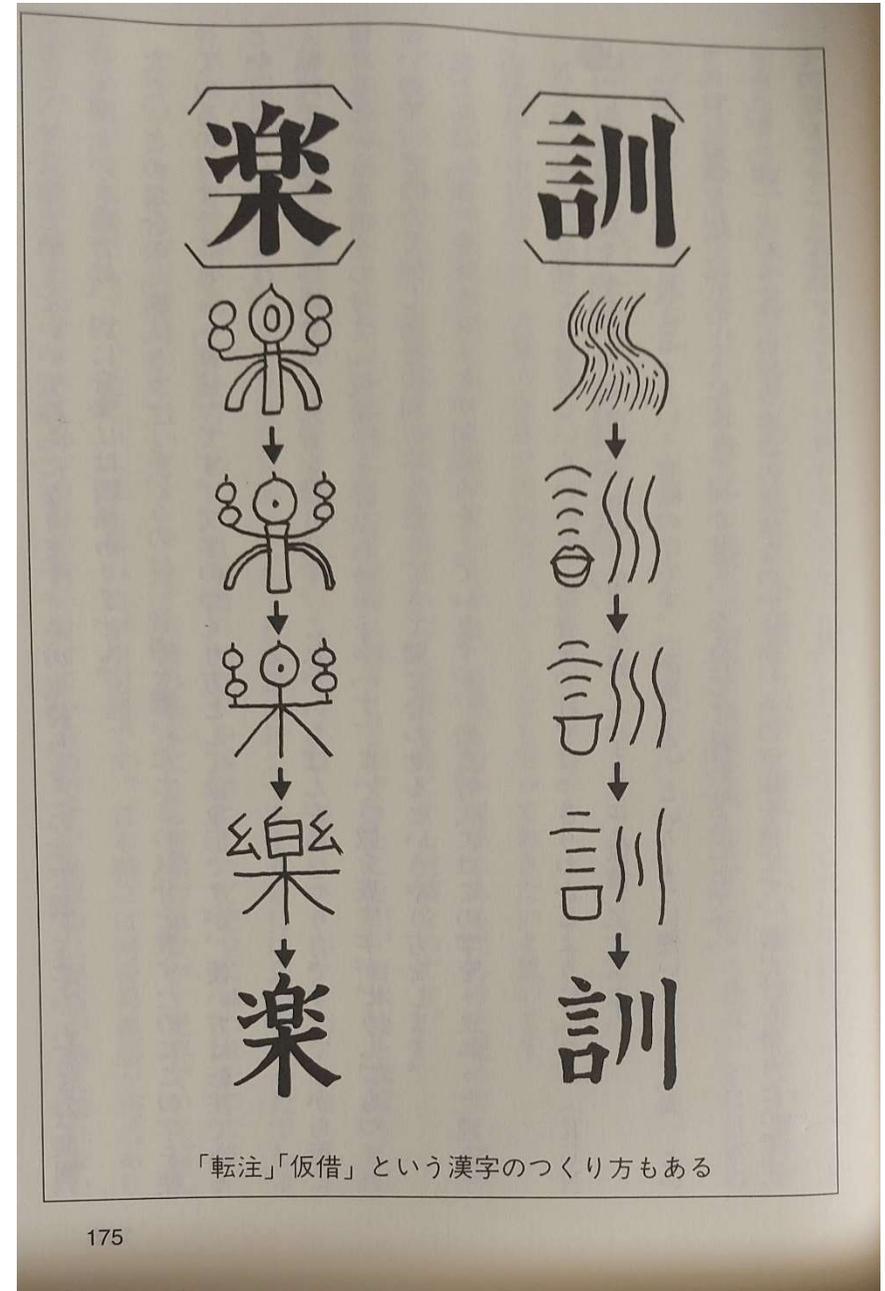
ですから、知らない字を見てもわかるわけです。これが日本人の頭がよくなる理由です。漢字
を使っているから、自然と頭を働かせているのです。

ポイント どんな漢字でも、教える時には漢字を見せて話をしなくてはダメで、言
葉で言うだけではいけません。たとえば「手を洗う」という話をするとき
は、黒板にちゃんとその字を書く必要があります。常用漢字にあるうと
なかつると、とにかく漢字で書けるものはすべて漢字で書くべきです。

●……借りてつくる「転注」と「仮借」

「転注」という用法があります。まず目に見える「象形」と、心の中で形づくる「指事」によって表
し、それから組み合わせの「会意」と「形声」によって文字というものが拡大していきます。ほとんど
の言葉がこの四つの用法によって表現できるようになったのですが、どうしてもつくりにくい言葉が
あります。

言葉を文字化しようと思っても、なかなかうまく文字に表現できません。その場合に第一に考
えられたのが「転注」という用法です。



ここに「楽」という字がありますが、「楽」というのは楽器の象形です。真ん中にあるのは太鼓で、その脇にあるのが叩くとガチャガチャ鳴る打楽器です。これが台の上に乗っています。実際にこんな楽器が宮中や神社に備え付けられていました。つまり楽器を意味した字です。

ところが、その楽器を使って演奏されるものを表すときに、そういうことを表す文字をつくるというのはむずかしいので、楽をそのまま使って「音楽」という言葉にします。そうすると、英語の「MUSIC」という意味を表すことができるわけです。

つまり、文字をちょっと応用して使う、使うことを「転注」と呼びます。すでにある文字を基にして、文字の意味をちょっと移動させるわけです。

ところで音楽を聴くといい気持ちになります。その気持ちもこの字で表します。たとえば楽園。この楽園という場合は、別に音楽には関係ありません。

ただ、この場合の「楽(ラク)」というのは、音楽を聴いたときの気分を表すためにこの字を使っているのです。これも「転注」です。文字のつくり方としては象形ですが、使い方は転注であるということになります。

転注でもむずかしい場合は、発音を借ります。これがいちばん安易なやり方です。ですから仮に借りるといふ名前をつけて「仮借」と呼ぶわけです。「十」という数を表す字がどうしてもつくれないので、まったく同じ発音の別の字を借りてきて間に合わせるというやり方をします。

私たちは「訓」を「クン」と中国読みをしています。奈良時代にはこの字を「クニ」と読みました。Nという発音は単独では発音しにくいので、母音をつけてはつきりわかるように「クニ(KUN)」と読みました。つまり、「クニ」という発音を表す文字として仮借したのです。

「訓」という字は「教える」という意味の字です。「訓辞する」というように使いますが、「訓」というのは、言葉を川の流れのように流して聞かせて、なるほどと従わせることです。

それが「訓」という文字の持つ本来の意味なのですが、その意味を捨てて、音だけを借りたのです。その音が「クニ」です。

では「クニ」の意味するものは何かというと、「国」のことです。これは中国語では「コク」と発音しますが、日本では「くに」のことです。学者でも「クン読み」といいますが、それでは意味を成しません。「クニ読み」と読んで初めて意味を成します。「クニ読み」とは日本の国の読み方という意味です。

●……日本語は世界一音韻が少ない

日本語と中国語とは、言葉の世界の両極端だということも言っておきたいと思います。

よく日本語と中国語は同じ漢字を使っているから、言葉も近い関係にあるだろうと思っていますが、世界の言語の中で、日本語と中国語とはまったく性質を異にする言葉なのです。

日本語の足りないところを中国語によって完全に補うことができたことが、日本語を素晴らしいものにした最大の要因です。

中国語と日本語が似たような言葉であつたら、日本語に対してあまり役には立たなかつたでしょう。あまりにも性格が違っていたために、日本語の欠点が中国語によって完全に捕われたのです。どういふところが両極端かといいますと、まず言葉の基本になる音韻の単位が、世界でいちばん少ないのが日本語であつて、逆にいちばん多いのが中国語です。日本語には同音異義語が相当あり

ますが、中国語ではそれをすべて異った音で言い分けているのです。世界中に民族が数え切れないほど、それらの民族のもっている言葉の音韻というのは、中国語よりは少なく、日本語よりは多いのです。

ですから、日本語と中国語の間に世界中の言葉がすべて入ってしまうのです。私の知る限りでは、日本語ほど音韻の少ないものはありません。

日本語は、アルファベットならわずか一九個の文字ですべて表すことができます。全部使う必要はありません。ローマ字では「ラリルレロ」にあたるものには、「R」「L」のついたものがありますが、日本語を話す場合にはどちらかを使えば一方はいらなくなってしまいます。「C」は「K」か「S」のどちらかでいいし、「X」はもちろん必要ありません。

こういうふうにしてしまうと、日本語をローマ字で書くと、一九個の文字だけで完全に表記でき、発音はそれ以外にないのです。こんなに少ない民族はありません。これが日本語の大きな欠点です。欠点であるけれども、一方では長所と見ることもできます。

●……日本人は音韻を区別できない

つまり、日本語くらいどんな言い方をしても正しく伝わる言葉はありません。ところが音韻が少ないために、日本人の耳ははっきりしたわずかの音韻しか聞き分けることができない耳になってしまいました。

音韻を聞き分ける聴力というのは、幼児期につくられます。ですから大人になって外国語を学ぼうとしても、とくに音韻の多い中国語は日本人には不可能といっていくらい困難です。

私は青年期に六年間中国語を学習しましたが、結局ものにはなりません。耳がどうしてもついていけないのです。

中国語は一六四種類の基本的な音韻をもっています。日本語は百いくつかで間に合います。中国ではその発音を聞き分ける耳を、幼児期から養っているのです。

ですから中国人の耳というのは私たちの耳とは全然違います。中国人は英語を学んでもドイツ語を学んでも、実に見事に聞き、しゃべります。これは聞き分ける耳が発達しているからです。

では、音韻の少ない日本人ではどうしたらいいかというと、これは耳の発達する幼児期に、外国語の豊かな音韻を耳から入れるしか方法はありません。耳さえつくっておけば、大人になってから外国語を学ぶ必要が生じたときに、きっと役に立ちます。

ポイント 「馬」という字を教えるためには、父親が子どもをわざわざ牧場へ連れて行って、「これが馬だよ」と言ったという話を聞いたことがあるのですが、こういう教え方がいちばん効果があります。絵よりも実物を見せたほうがいいのは言うまでもありません。子どもの興味をそらさないような教え方をしないと、やがてそっぽを向くようになりますから、伸びないのです。

………抽象性に富んだ日本語

漢字は具体的な言葉が多いのですが、日本語は非常にそれが少ないのです。

たとえば「みる」という言葉は面白い言葉です。いろいろな意味で使います。目で「みる」のはもちろんですが、味を「みる」、熱さ加減を「みる」というように使います。味なら目でみると思う人はないし、熱さならこれは手でみるしかない。脈を「みる」も同様です。

このようにいろいろな使い方をします。でも、どれも言葉としては「みる」になってしまいます。そういう意味では、日本語は非常に抽象性に富んでいます。

「みる」の漢字の成り立ちについて説明しましょう。

「見」という字は目の働きですから、目という字が基礎になります。その下に何があるかというと、人という字です。この字は人と目とでつくられた漢字です。つまり会意文字です。人は目でどうするの？ 「見る」という意味がここから出てきます。

しかし、このときの「見る」というのは目の働きとしての「みる」ですから、単に見るといふときに使う字です。

「視」という字は、神様を意味する「しめすへん」がついています。これは神様を祭るときに、手落ちはないかという気持ちでみることです。やり残しはないだろうか、という態度で「視る」ことをいいます。したがって、上司が「視察に来る」などというときにはこの字を使います。

●……言葉には民族性がある

言葉には伝統や慣習があり、また民族性も備わっています。

前項と同じように「みる」という日本語で考えてみましょう。

漢字で表すと、見(ケン)、視(シ)、観(カン)、看(カン)、診(シン)といろいろな用法があります。英語でもそうです。SEE、LOOK、WATCHなど、いずれも日本語に翻訳すれば「みる」という行為を表す言葉になります。つまり単に「みる」といっても、いろいろな「みかた」があることがわかります。

意志を持って積極的に「みる」という場合は「視る」になります。細かいところにまで注意して「観る」というみかたもあります。病人の世話をするのだしたら「看る」ですし、医者が診断することは「診る」になります。これらをみんな「みる」というひとつの言葉で集約しています。“かな”の「みる」ではこの区別がつかないのですが、漢字で表すと判別できます。これは英語などの外国語でも同様で、同じ「みる」にも、いろいろな「みる」があります。

エスキモーでは、積もっている「雪」と、降っている「雪」とは言葉が違います。つまり、降っている雪と積もっている雪とはまったく性質が違いますから、言葉として一緒にして「雪」という言葉で呼ぶのは、エスキモーにはかえって不便なのです。

「牛」という言葉があります。日本語では牛という言葉には雌雄の区別をしていません。ところが、英語では雄でもない雌でもない「牛」はいません。一頭いるか、それ以上いるかでも、初めから言葉が違います。牛のことをOX(オックス)といいます。OXといえば一頭です。たくさんいるときにはOXEN(オクスン)です。オクスンと聞くだけで、一頭ではないということがわかります。言葉が数まで示しているわけです。しかも、OXは雄牛に決まっています。雌牛のことをOXとはいいません。同じ雄でも去勢されていなければOXとはいわず、BULLになります。雌だったらCOWになります。牛といえば子牛を産む雌牛しか価値がないから、ほとんどはCOWでしょう。ですから牛飼いのことをCOWBOY(カウボーイ)というのです。

私たちが牛を見るとときには雄も雌も関係ありません。ところが英語を話す人たちは、雄か雌かがわからなかったら言葉が喋れないし、そこに何かいるかも考えることができないのです。つまり

雄か雌か、と見た瞬間に頭の中で考えるわけです。私たちは言葉によってものを考えるから、ものを見る前にまず言葉によって見ているわけです。

日本語というものは雄雌を超越しているし、数というものも問題にはしていません。ところが、そういうものを問題にしたのが欧米人なのです。彼らは昔から家畜によって生活を営んでいたので、その当時につくられた言葉にとっては重要なことだったのです。雄でもない雌でもない「牛」という言葉は不便だったのです。

初めから雌牛という言葉をつくり、雄牛という言葉をつくり、去勢すればまた呼び名を変えたのです。言葉を必要に応じて変えていったわけです。

日本語にそのような区別がなかったのは、必要がなかったからです。言葉はその民族の必要からつくられるものです。欧米人たちはその必要性に応じて言葉をつくってきました。中国人が漢字をつくる場合も同じです。

日本語で「みる」と言ったときに、いろいろな「みかた」があるのに、これを区別できたのは漢字のおかげです。漢字を使うことによって、どんな見方をしているかわかります。もし漢字がなかったら、

どんな見方をしているのか判別することができなかつたでしょう。

このように、私たち日本人は、生活の中で漢字を無視しては生きられないのです。

ポイント まず子どもの目を見てやらなければダメです。親の話喜んで聞いている
 かないか……。喜んで聞いていないと思ったら、イヤがる前にやめること
 です。イルカだったら別効果があるかもしれませんが、人間はそんなことを
 したらますます嫌いになります。

●……漢字は学問の基礎である

漢字というものは本当に素晴らしいもので、あらゆる学問の基礎、日本人にとっては基礎中の基礎なのです。この力を伸ばして、より多くのものを身につけさせてやるということが、教育でいちばん重要なことです。

子どもには自ら進んで学ぼうとする本能があるから、それを正しく伸ばしてやり、自ら求めさせるような環境をつくって、いたずらに詰め込んで口を開けて待つような子どもに育てないでい

ただきたいのです。

今の幼児教育は、あまりにもいろんなことをやり過ぎます。欲を出さなくていいのです。あれもこれでもできるということは、何もかもいい加減にしかできないという欠陥を、当然秘めているわけです。昔から「多芸は無芸」といいます。何もかもできるといえることは、何もできないということに通じます。

一芸に秀でていればいいのではないですか。その一芸の、いちばん基本になるものは何でしょうか？ それは、まず読解力を養うことです。読解力を養うためには、その基本である漢字を身につけねばなりません。これさえやれば、どんな道でも自然に聞かれています。

幼児に対する漢字教育は、詰め込み教育であってはいけません。そういうやり方をすると、最初は興味を持って間もなくそっぽを向くようになります。そうなるともう伸びなくなります。子どもは自分で知りたがっているということを、いつも念頭に入れておいてください。

子どもが持っている「自分から求める」能力を生かすようにしないと、子どもは親から指示されなければ何も考えようとしないうちに、学ぼうともしなくなります。まして自分の頭を使って、新分野を開拓する気持ちは起きるはずがありません。

今の教育は、子どもたちが本来持っているヤル気の芽を摘むようなやり方です。

私の漢字教育の基本は、「漢字で教える」ことです。大人が「漢字を使う」ことです。大人が使ってみせることで、かたわらで聞いている子どもの言語生活が豊かになっていくのです。

いちばん必要な能力は、本を読む力です。楽々と読むのと苦労して読むのでは、一生の間に大変な違いが出てきます。子どもときから本を読めるようにする、本に興味を持たせるためには、幼児期からの漢字教育は不可欠です。

小学校から漢字を学ばせる——これが常識になっている今日の教育者の認識では、まったく理解におよばないでしょう。しかし幼児期からやればどんな子どもだって容易に本が読めるようになります。ところが大事な幼児期を無為に過ごして、小学校へ入ってから始めるので、苦労しても身につかないだけなのです。